

2017年 秋号

第99号

僧伽編集委員会

〒921-8031  
金沢市野町2丁目32-4  
徳法寺内  
TEL (076) 241-5219  
題字 本多 千翠

# 僧伽

「私どもがこの世に生まれることは、ある意味で悩むためにうまれてくるともいえる。」  
本多弘之『親鸞に人生を聴く』

本多弘之…元大谷大学真宗学助教授。著書多数。『親鸞に人生を聴く』は本号六ページ本の紹介コーナーを参照されたい。



生駒泰充「阿保の治療」2016年

## 阿保の治療

常德寺 西山 彰

人は宗教に「癒し」を求めるという。それは本当に正しいのだろうか。仮にその癒しが「悩む」ことからの解放であるならば、それは見当違いというほかない。

悩む力は、人間に与えられた特有の能力であり、生きる力そのものである。ところが面倒なことに、人はどこかで悩むことをやめて思考停止の状態にあこがれる傾向を持つ。

しかしその先に待っているのは、自分で物事を考え判断できなくなる状態である。それは人が人でなくなるといふことであり、心地よい死に他ならない。

最近見た絵画作品の中で、生駒泰充氏の「阿保の治療」という、人を食ったような二〇

〇号の大作は秀逸だった。私にはこの絵が、現代社会のみならず、人間存在そのものへの痛烈な風刺であり警鐘であると思えてならない。

どれだけ科学が進歩しても、世の中にはびこり続ける怪しげな宗教や疑似科学。それらが信じるに足るものであるかどうかは問題ではない。むしろ人々は怪しげな言説にこそ群がっていくのである。

思考停止状態の人間を再生産するサイクルは、延々と続くのだ。阿保の治療に終わりはない。

そのような連鎖を断ち切るのが、念仏の教えではないだろうか。そんなことをテーマに秋号の原稿を書かせていただいた。

## 岡田陽恵



## 日常は落語である

高校を卒業してすぐに就いた仕事は、調剤薬局で医療事務や調剤補助をする仕事だった。

しかし、一年程で飽きてしまい辞職し、小さなイタリアンレストランで働く日々となる。

様々な人間模様が展開される飯屋の仕事は労働時間が長く、消耗はすれど面白かった。

もともと計画性がない私がフリーターで暮らしている力はなくて、飯屋での仕事は三年で生活が詰まり、以降十五年間さまざまな仕事を経験した。

なっていた。

私は福島県いわき市で生まれ育った。

震災後、いいことも悪いことも経験した。忘れてはいけない、語らなくてはならないと切迫し続けた年月だったと思う。

ある夜、白ワインを飲めば飲むほど冴えてゆく自分が、ふと恐ろしくなった。真冬でも汗をかいて起きるようになった。

そのすぐ後に五年勤めた旅館を退職した。

それから愛媛県八幡浜市に渡り、真穴みかんを摘み取る季節労働に出かけた。リュックひとつ背負って、すがすがしい気持ちよりもまず、福島を離れることに罪悪感があったことを覚えている。

その後半年ほど、みかんで働きながら四国を旅した。みかんの仕事は山登りか

らはじまり、山下りで終わる。夕陽を眺め風呂につかり、アルコールを飲む前に体が眠る。

季節労働仲間と毎日談話室で話をした。

以前の旅で危険な目にあつたこと、さつき道に咲いていたダリアがきれいだったこと、旅暮らしをいつまでしようか悩んでいること。考えることは多かつた。

現在私はいわきに戻り、ある建設現場、大手ゼネコンの工務アシスタントとして働いている。ゼネコンに抵抗があつた。正直に言えば今も抵抗があると思う。しかし、事務所の若手は毎日汗だくで、まっすぐな目をして働いている。

仲良しの男の子に、なぜゼネコンに入ったのかと聞いたことがある。彼は「大きい建物を建てたかったから」と子どものようなことを言った。

現場にはさまざまな場所から集まった職人さんも多い。

強面にも慣れたので軽口も叩く。

いつの間にかよく笑うようになった。

いま、アルコールを飲まなければ眠れなくなることはない。

会社の契約はあと一年。つぎは何処で仕事をするのか、どこで生きるのか自分でも見当はついていない。

震災はいつまでも追いかけてくる。きつと死ぬまで追いかけてくるだろう。

だから、私はせめて日常にユーモアをと思いつつながら今を生きている。

プロフィール(略歴)  
岡田陽恵 おかだはるえ  
福島県いわき市在住の  
一九八一年生。  
現在派遣社員。たまにエッセイを書きます。

# 和讃に学ぶ

## 第五十三回

徳法寺 杉谷 浄

### 彼岸と三途

「三途」と聞くと「三途の川」を思い浮かべるかと思いますが、親鸞聖人は違うようです。

佛光照曜最第一  
光炎王佛となづけたり  
三途の黒闇ひらくなり  
大応供を帰命せよ

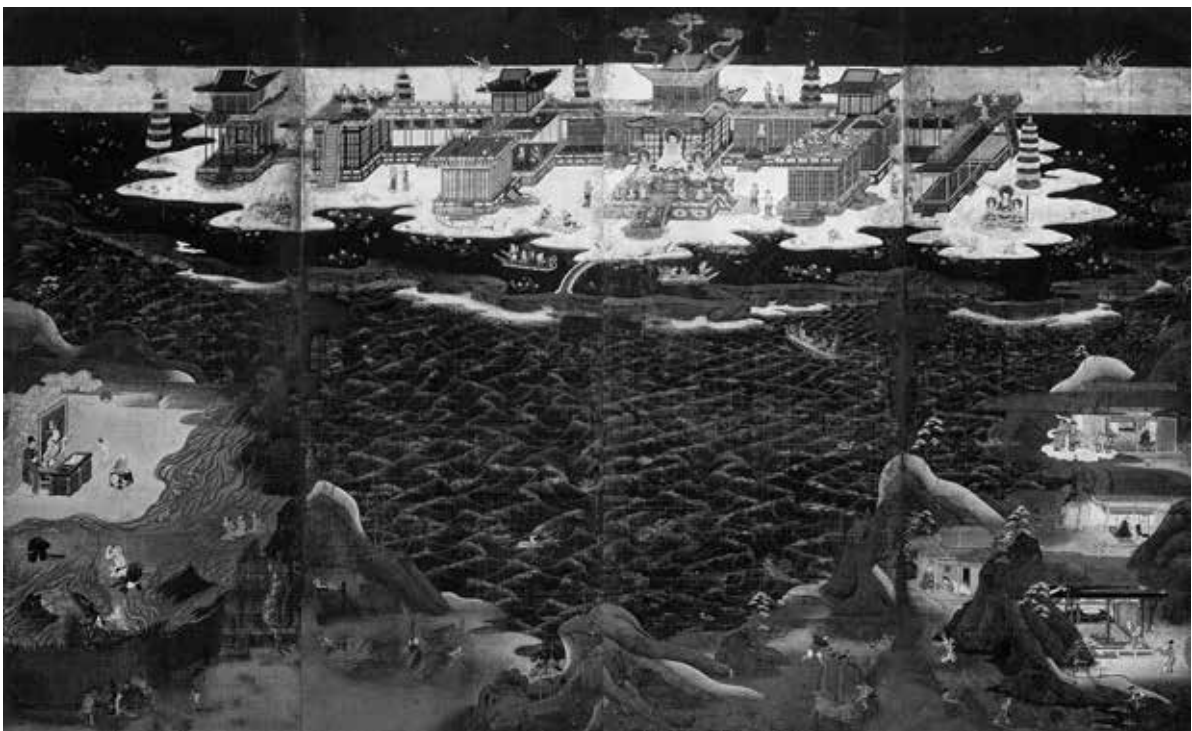
意味は「阿弥陀仏の智慧が私たちを照らし出してくれる力は、どの仏の智慧と比べても最も優れていることから、光炎王仏と名付けられています。その智慧の光は、三途の漆黒の闇さえも照らし出すほどです。その様な阿弥陀仏ですから、帰命すべきなのです」となり、親鸞聖人は「地獄、餓

鬼、畜生、くらき闇なり」と意味を添えています。つまり「三途」は川ではなく、地獄・餓鬼・畜生という暗闇の世界のことです。

下の絵は、親鸞聖人の時代に描かれたものです。下に「彼岸」と呼ばれる地獄界、餓鬼界、畜生界、人界が描かれ、海を挟んで上に「彼岸」と呼ばれる極楽浄土が描かれています。「彼岸」は自分が何者かもわからず必死になつてもがき苦しんでいる世界で「彼岸」は智慧に照らされて自分の姿が明らかになり安らかに生きる事ができる世界です。和讃には、阿弥陀仏の智慧が私の闇を照らし出してくれ」と詠われています。ただし、そこに現れる私の姿は、煩惱から離れることができないという現実です。その

事実を受け止めることができた時に、身をゆだねることができるようです。下の絵には「彼岸」に向かう船が描かれています。親鸞聖人はこの海を越える船が念仏であるとおっしゃっています。自分の力で海を渡るのではなく、舟に身を任せて荒海の様な人生を安心して渡ることができるようです。

「三途の川」は、日本で作られた『地藏菩薩発心因縁十王経』にある「葬頭の河」からきています。そこに大河を渡るのに山水の浅瀬、河の深淵、橋の三通りがあると書かれています。この三通りが「葬頭」と音が似ている「三途」になりました。奪衣婆などもこの経典に登場します。平安時代には作られていたようですが、親鸞聖人の頃には偽の経典とされていたため、それほど重要視されていませんでした。しかし、江戸時代には正式な経典として認知され広がったようです。仏教も時代と共に変化しているのです。



地獄極楽図屏風 京都金戒光明寺所蔵

## 真宗豆知識

## 馬鹿 (莫迦)

「馬鹿」という言葉の由来はご存知ですか。秦の権力者であった趙高が、皇帝に鹿を馬であると献上したところ、多くの家臣が趙高を恐れて「馬である」と答えたのに、正直に「鹿である」と訴えた者が暗殺された、という故事からきているという話が有名です。しかし、これは「ばか」という音が先にあり、後からこの中国の故事を関連させて「馬鹿」という字が当てられたのであつて、語源というわけではないのです。

「母娘」「馬娘」「破家」などという当て字も使われていました。当時の意味は「狼藉」ということですから、「愚か」というよりは「乱暴」ということであつたようです。平安時代から使われ始めたようで、親鸞聖人がいらつしやつた鎌倉時代には一般的に使われていたようです。今でもインド東部で使われているベンガル語で「ばか」は日本と同じ意味で使われています。

関西でよく使われている「阿呆」(阿保)は、中国江南北方の方言です。日明貿易の頃といえますから、蓮如上人のいらつしやつた室町時代に、禅宗の僧侶によつて伝えられたようで、今でも上海などで使われています。ただし、発音は「アーダイ」となります。「阿」は可愛らしいものに付ける接頭語ですから「馬鹿」よりも柔らかな意味になります。北陸や山陰で使われる「だら」は、もつと古い和語のようです。

ですから、古い方から並べると「だら」「ばか」「あほう」ということになります。赤塚不二夫の「天才バカボン」の「バカボン」は、週刊少年マガジンでの連載第一回で「バカボンとは、バカなボンボンのことだよ。天才バカボンとは、天才的にバカなボンボンのことだよ」という説明文が記されていたそうです。しかし、現在はサンスクリット語の「バキヤボン」(薄伽梵)に由来することになっています。これは「徳が成就した者」という意味で、お釈迦様を称えた言葉です。言われてみれば、バカボンのパの決まり文句である「これでもいいのだ」は悟りの境地にも思えます。また、いつも掃除をしているレレレのおじさんは、お釈迦様の弟子で、お釈迦様の教えを全く理解できなかったものの、お釈迦様から「お前は掃除さえしていれば良い」と言われ、ひたすらに掃除



(浄)

## 『心の相談室』

毎月第四土曜日  
午後三時～五時  
東別院横

「いちよう館」二階  
相談無料

日常生活でのいろいろな悩み、家族のこと、友達のこと、学校のこと、仏事の疑問等を、僧侶がお聞きします。

## 杉谷浄の

## ラジオ案内

十月三日(火)

十一月七日(火)

十二月五日(火)

F.M.N-1(七十六・

三MHz)で午後一時半から一時間放送します。

番組名は「生活一番シャトル便 住職のよもやま話」です。再放送は放送日の午後十一時と土曜日の朝七時からの二回です。インターネットでも聞けます。



映画の紹介

「あん」

二〇一五年  
主演：樹木希林  
河瀬直美監督作品



「生きるのも日常、死んでいくのも日常」  
死は特別なものとして捉えられているが、死というのは悪いことではない。そういつたことを伝えていくのもひとつの役目なのかなと思いました。

これは、以前小紙で紹介した、樹木希林さんの言葉である。自ら癌であることを告白したところから、この人の活躍は女優の枠を超えているように思われる。

映画のタイトル「あん」とは、あんこのことである。千太郎は、刑務所帰りのさえない中年男。現在は借金を返すためにどら焼き屋の雇われ店長をしている。そんな彼の前に現われたのが、謎の老女徳江だった。徳江は店で自分を雇ってほしいと懇願する。彼女は、小豆を美味し

く煮る特技があった。やがて彼女が作る粒あんが評判を呼び、どら焼き屋は繁盛する。

しかしある日を境に、客足は急に途切れた。店であんこを作る老女がハンセン病を患っているという噂がひろがったからだ。確かに小豆を煮る徳江の指先は、不自然に曲がっていた。それは紛れもなくハンセン病の後遺症だった。

ハンセン病はかつて「らい病」ともいわれ、不治の病だった。しかし現代医療ではそれを完全に治すことができる。徳江の場合も、何十年前前に患った痕が、指先に残っていたにすぎなかった。しかし世間の無理解と偏見の前に、彼女は黙って店を去るしかなかった。

ハンセン病患者を一般社会から隔離する「らい予防法」が廃止されたのは、ほんの二十年ほど前である。しかし、その後もこの病に関する社会の理解が進んだ

とはいえない。そんな中で、元患者が日の当たる場所にいたいという願いは、私たちの想像以上に強い。

店で働いた時間は、短かったが、徳江の人生の中で最も充実した時間だったのだ。そのことを千太郎が知った時、療養施設の中で徳江は帰らぬ人となっていた。

この施設に暮らす人々は、子孫を残すことも墓を作ることも許されない。徳江はそんな人生を静かに受け入れ、死んでいったのだった。これほどまでに画面で輝く樹木希林を見たことがなかった。徳江の優しさが画面からこぼれ落ちるような、そんな映画だった。

ドリアン助川の同名小説を映画化したもので、千太郎役に永瀬正敏、ワカナ役には樹木さんの孫娘である内田伽羅が扮した、珠玉の一作である。また監督の河瀬直美は、カンヌ映画祭など海外でも評価が高い。

(彰)

『サンガ茶話会』

毎月第一木曜日  
午後三時～五時  
東別院真宗会館内  
囲炉裏の間  
お茶とお菓子をいただきながら、お坊さんと気楽にお話できる空間です。相談というほどではないにしろ、ちょっと聞いてみたい、いろんな人と話してみたいという方大歓迎です。もちろん無料です。お気軽にご参加ください。

徳法寺のホームページのご案内

「僧伽」のバックナンバーや報恩講、春秋彼岸の案内、お講の案内、学習会のレジュメ、交流広場などを載せています。アドレスは <http://tokuhou-ji.com/> です。是非覗いてみてください。

# 本の紹介

## 『親鸞に 人生を聴く』

本多弘之  
草光舎

「いのちは尊い」と言うのは簡単である。しかし、浄土真宗がいのちの大切さをどう教えているのか正確に述べ

ることは、決して簡単なことではない。いのちに関して、聖人が直接言及されたものはほとんどないからである。

にもかかわらず、真宗教団は、いのちという言葉が大

好きである。「いのちがあなたを生きている」という御遠忌テーマは今も記憶に新し

い。それは、阿弥陀(アマタ)という言葉が、無限のいのちを意味することからくるの

かもしれない。また、いじめや自殺の問題に対して無関心ではいられないという時代の要請を、教団が敏感に感じ取っているからと見ることもできる。

『親鸞に人生を聴く』とは、絶妙なタイトルである。親鸞聖人の残された言葉もさることながら、ご自身の生き方そのものから浄土真宗を説明していこうという試みである。ご苦労の多かった聖人の九十年の生涯の中にこそ、真宗の奥義があるということであろう。

聖人のご一生は、ご自身の癒しや幸福を求めるとかいった類のものでは決してなかった。本多氏は、まさにその聖人の苦難の歩みこそが、いのちの本質を語っていると説くのである。

そのあたりについて、本書における本多氏の考えを、私なりの解釈を加えてご紹介したい。

いのちとは、一点にとどまらず絶えず変わり続けているものである。それは腎臓が毎日体内の血液を浄化していくように、いのちは本来自己浄化を繰り返して、変化している。しかし私たちの意識は、そのようないのち本来の在り方をありのまま受け入

れることができない。いのちを固定的にとらえようとすると、それがどこか休息するところが救いであると勘違いし、それを求める。しかしその欲求は、いのちの本来の在り方に逆行するものであり、結果的にいのちを疎外することになる。

いのちの在り方に誠実な生きようとすれば、人は歩みを止めることなく、変化し続けることになる。そこには自分の得た成果に腰を下ろすことなく、常にこだわりを廃し、戦い続ける姿勢が必要である。仏教とは本来それを教えるものである。

親鸞聖人は、弥陀の本願という一点静かなものに触れながら、本当のいのちを回復すべく一生を歩み続けた方である。

これが本多氏が聖人のご一生からくみ取られたいのちの意味である。ここで注目すべきは、いのちが私たちの意識、欲求とは相反する形で存在しているという指摘

であろう。一見地味だが、氏の明確な論旨には目から鱗が落ちる思いだった。

安易な答えを与えてくれるものが、真の宗教ではない。苦悶しながら生き続ける者にこそ、いのちはその意味を明かにするのだ。(彰)

### 各寺のご案内

#### ◆常徳寺

金沢市寺町  
五丁目一番二九号

#### ◎報恩講

十月十日(火)

お速夜 午前十時

お日中 午後一時半

法話 佐々木五六師

#### ◆徳法寺

金沢市野町  
二丁目三二一四

毎二四一―五二一九

#### ◎お講(石坂同信会主催)

毎月二十一日  
午後七時半より

講師 十月 藤塚 曼  
十一月 杉谷 浄  
ご自由にご参加ください。  
十二月、一月、二月はお休みします。

徳法寺のフェイスブックとツイッターを始めました。個人的な情報も載せていきます。是非ご覧になってください。フェイスブックは杉谷浄、ツイッターはtokuhouujiですので、検索してみてくださいね。

#### 編集委員

西山 彰(常徳寺)  
杉谷 浄(徳法寺)

